

七、水賊の女

ブラゴベシチェンスクの郊外で、ハナに率いられた馬賊がロシア軍の鉄道工事現場を襲撃したのに居合わせてから数日後、私とソヒョンは汽船に乗り、十日間のアムール川旅を経て、ウラジオストックに着いた。

さっそく日本総領事館付き駐在武官の伊東大尉のもとに出頭し、報告書を手渡した。

「大変だったな」

報告書に目を通したあと、伊東大尉は嘆息して言った。

「ロシア軍が清国領内に侵攻してからというものの、満州はどこもかしこも大騒動だ。怯えた清国の役人や軍人どもが、先を争って逃げ出しておるらしい」

瓊瑋あいくんがまさにそうだった。司令官をはじめとする軍幹部や、高級官吏、富裕層が真っ先に逃げだそうとしたのだ。水野ハナや、正義感の強い清国軍人の尽力で、貧しい人々を逃がすことができたものの、他の都市ではそうはいかなかっただろう。

「困るのは、軍事探偵に雇った浪人連中だ。あいつら、仕事もせず逃げ出して、連絡も寄越さない。おかげで満州の様子がよく分からん。君のような信頼できる者がブラゴベシチェンスクにいてくれて、とても助かっておるよ」

今夜はゆっくり休め、と伊東大尉は言った。

「明日の夜、一席もよう設ける。ぜひ、話を聞かせてくれ」

次の日の夜、ウラジオストック市内の和式料亭に向くと、座敷には伊東の他、背広姿の日本軍将校五名がいた。いずれも私と同様、軍人の身分を隠し、各地で諜報活動に任持している者たちとのことである。

私は、ブラゴベシチェンスクや瓊瑋でのロシア軍の動きを話した。水野ハナについては伏せておくつもりだったが、伊東大尉が、

「例の日本人の女馬賊はどうなったんだ」

と言い出したので、他の将校たちが「誰だ、それは？」と口々に訊ねた。

私は仕方なく、伊東に向かつて、

「ロシア軍が瓊瑋を攻めたとき、清国軍の一部軍人が馬賊と協力して避難民を守って戦ったそうだ。そのなかに彼女もいたらしいのだが、その後、行方は分からない」

と答えた。

「なんだ、まだ彼女を妾めかけにしていなかったのか？」

伊東大尉は苦笑した。

「君は堅物かたものだ。素晴らしい軍事探偵だが、色仕掛けには向いておらん」

「美人なのか？」

「年はいくつだ？」

将校たちが身を乗り出すようにして口を挟み、伊東は笑顔で答えた。

「俺は見えていないが、まだ若くて、なかなかの美形らしいぞ」

「菊池中尉、隅におけんな」

「羨ましく」とだ」

哄笑する将校たちを見やりながら、ふと、ソヒョンが同席していたら、全員のきんたま潰したい、と言いだしかねないな、と思った。

「それで、菊池中尉」

一番階級が上の花山少佐が言った。

「君は、これからどうする。大変な任務の後だ。しばらく帰国して休んだらどうかね」

「いえ」

私は首を横に振った。

「齐齐哈尔に行くつもりです」

「齐齐哈尔？」

将校たちは顔を見合わせた。齐齐哈尔は、二年前から建設が始まったロシアと清を結ぶ東清鉄道の沿線にある都市だ。むろん、ハナが避難民たちにそこに向かうよう指示した町であり、いずれ彼女もそこに現れると思っっているからだ。

だが、将校たちにはこう説明した。ロシアが瓊瑤と齐齐哈尔を結ぶ街道に沿って簡易鉄道を敷設しはじめており、これが完成すると、ちょうど齐齐哈尔で東清鉄道に合流する形になる。

「なるほど、ロシアにとっては、満州侵略の要衝の地になりかねないわけだな」

花山少佐は大きく頷いて、

「菊池中尉、ぜひ、お願いする。伊東大尉、経費はたっぷり弾んでくれ」

と言い、声をひそめて続けた。

「北京ではすでに、八カ国連合軍が続々集結しておる。その数は二万に達する予定だ。清国が降伏するのは時間の問題だよ。そうなると、日本とロシアは友軍ではなくなる。すなわち、満州をめぐるロシアとの勢力争いが始まるだろう」

伊東大尉も、腕組みして頷きながら言った。

「今まではロシアの手前、表沙汰にはできなかったが、今回の騒擾でロシアと戦った馬賊や、義和団の残党もなるべく味方につけておきたい。菊池中尉、今度こそ頼むぞ」

花山少佐が、卑猥な笑みを浮かべて言葉を添えた。

「そして、水野ハナという美女を、今度こそ君の妾にするのだな。これは役得だ。いやいや、お国へのご奉公であり、義務でもある」

その夜、私はひどく泥酔した。将校たちはその後、ハナについて根堀り葉堀り聞いた

がり、しまいには満州で商売をしている様々な民族——ロシア人、支那人、朝鮮人、そして日本人——売春婦の品比べとなった。

水野ハナと出会ってから、私の心に刻みつけられた数々の思い出が、同国人の、同じ軍人の口によって、ひどく低劣な挿話に仕立てあげられる事が耐え難かった。とはいえ、ここで彼らの気分を損ねたら、軍事探偵として経費を受け取ることができなくなり、この広大な大陸でハナと再会する機会は永久に失われる。

やがて芸者が呼ばれ、座敷はさらに賑やかになった。私は浴びるように酒を呑み、ブラゴベシチェンスクで覚えたコサツクの踊りを披露したり、故郷の歌をうたったりした。

そして翌朝。

ドアを叩く音がして、私は眼をさました。ドアを開けると、ソヒョンが立っている。

「菊池さん、くさい」

鼻の前で手をひらひらさせたソヒョンは、こう言って笑った。

「日本の軍人さんと酒呑んだあと、菊池さん、すごくくさい」

「そうか……」

私はベッドから降りて歩き出そうとして、よろけた。

「だいじよぶか、菊池さん」

ソヒョンが駆け寄って、私の身体を支えてくれた。危うく彼女を押し倒しそうになったが、なんとか平衡を保った。

私は痛む頭を抱えながら、よろよろとベッドに座り、

「すまないね、ソヒョン」

と言った。ソヒョンは微笑んだ。

「ほんと、世話焼ける人、だな」

十二歳の孤児に世話を焼いて貰っている三十歳の大日本帝国予備役陸軍中尉か。私は苦笑するしかなかった。ソヒョンは問うた。

「お金、もらったか？」

「ああ、必要なものはすべて支給された」

「では、朝ごはん食べたなら、出発する」

朝食を終え、荷物をまとめてウラジオストックの駅に向かった。私は、ロシアの農民服であるルパシカを着た。ソヒョンも同様に半袖のワンピースにエプロンでロシア農村の少女らしく装った。

駅前は群衆がごった返していた。これでは切符の入手は困難かもしれないと思ったが、売り場ではすんなり三等切符を二枚売ってくれた。プラットフォームで待っている客車に乗り込み出発を待っていると、逆方向からウラジオストックに着く汽車が入ってきた。そこらは乗客がぎっしり詰まっていた。客車の屋根や窓にしがみついている者もいる。嫌な予感がした。

正午、ニコリスクという駅で、汽車が止まった。車掌が客車に入ってきて、みな降りる、

と連呼した。何事か、と訊ねると、汽車はこれ以上、西には行かない、と言う。東清鉄道沿線の各都市は、ロシア軍を恐れた清国軍や官吏が逃げ出したため、無政府状態に陥り、盗賊が跋扈している状態で、とても汽車を走らせられる状態ではないと言う。

ならばなぜ、ウラジオストックの駅員は斉斉哈爾までの切符を売ったのだらう。納得がいかなかったが、車掌に抗議しても取り合ってもらえず、仕方なく汽車を降りた。駅は郊外にあつて、街までは二キロほど歩かなければならない。茫然としていると、

「菊池さん、お腹すいた」

とソヒョンが私の袖を引いた。見回すと駅前広場では、ロシア人女性や子供が、籠に食品を入れて売り歩いている。牛乳とソーセイジ、パンを買い、地面に座って食べた。

さて、どうしたものか……。すでに乗客は三々五々、街へと向かい、物売りも姿を消した。私はソヒョンと二人きり、座ったまま思案にくれてしていると、

「どうなさいました？」

頭上から日本語が降ってきた。見上げると、ロシア服を着た女性が立っている。二十歳くらいのすらりとした中肉中背で、はかなげだが端麗な面立ちだった。

「実は、斉斉哈爾に行くつもりでウラジオストックを出たのですが、足止めをくらったのです」

私は立ち上がって説明した。女性は驚いた顔で言った。

「斉斉哈爾ですって？ あのアたりは、とてもお子さん連れで行けるような状態ではありませんよ」

「そのようですね。ウラジオストックには、まだそんな話は届いていなかった。見込み違いでした」

「斉斉哈爾にはどういうご用件で？」

「ある女性を探しているのです」

私は、素直に答えた。

「あなたと同じ、日本人女性です。瓊瑋で世話になったのですが、今回の騒ぎで瓊瑋はロシア軍に蹂躪されたとか。もし生きているとすれば、知り合いが旅館を経営している斉斉哈爾に向かったはずなのです」

「その方は、あなたの奥様ですか？」

「いえ、旅館の太太（女主人）です。この娘はそこで働いていた小間使いです」

「可愛らしいのね」

女性は微笑んでソヒョンの頭を撫でた。ソヒョンは瞬きもせず、女性を見つめている。彼女は私に視線を移して問うた。

「で、これからどうなさいますか？」

尻尾を巻いてウラジオストックに帰るわけにはいかなかった。まだ決めていない、と言うと、

「では、私と一緒にハバロフスクへ参りませんか？」

ハバロフスクは、東の斉齊哈爾とは九十度違う北へ六百キロにある都市だ。鉄道で行けば一日がかりだという。

「そこに、私の夫がおります。満州で手広く商売をしておりますので、お役に立てるかもしれませんが。それに女の一人旅は不安です。私にとっても、連れがいると心強い」

私は、ソヒョンを見やった。相変わらず女性を凝視していたソヒョンは、私の眼差しに気づき、深く頷いて同意した。

「私は菊池真清、ロシア語を学びにきた留学生です。彼女はソヒョン」

そう自己紹介すると、女性は言った。

「私は、ユキと申します」

ソヒョンの眼が大きく見開かれた。私もはっとした。

ハナとは同年齢の親友であり、旅順で生き別れになっていた三原ユキ……。

確かに、目の前の女は、年頃はハナと同じくらいだし、彼女が肌身離さず持っていた口ケットの写真の少女に、似ていなくもない。

「あの……」

私は問うた。

「ひよつとして、三原ユキさんではありませんか？」

女の眉が一瞬動いた気がしたが、すぐに笑顔になった。

「私の名前は水野ユキです」

ハナと同姓ではないか……。またも驚いた私とソヒョンに、水野ユキと名乗った女性は問うた。

「三原さんとは、お探しの女性のことですか？」

「ええ、まあ……」

私は口ごもった。水野ユキは言った。

「同じ名前の女性をお探しとは、これも何かの因縁かもしれませんね」

ハバロフスク行きの汽車が来るまで時間が空いていたので、街に出て食料を買い込んだ。ハバロフスクまでは約一日の行程である。

水野ユキは、会話がうまく、気をそらさない女性だった。こちらのお腹がすいた頃合いを見計らって、食事にしませんか、と誘う。いつしかソヒョンは心を開き、ユキとのおしやべりに夢中になった。

だが、ユキが洗面室に行くため席を立った時、彼女の姿が客車を出るのを確かめたソヒョンは、

「菊池さん、あの女、怪しい」

と険しい表情で囁いた。

「菊池さん、三原ユキかって聞いた時、あの女、びくりしてた」

そして、それ以上は口を開こうとはせず、ユキが戻ってくるまで考え込んでいた。

アムール川に面したハバロフスクは、沿海州の首都であり、モスクワから派遣された総督府が置かれ、ロシアの極東進出の拠点とされていた。

東清鉄道ぞいの他の都市と同様、ハバロフスクの駅は市街から離れたところに建てられている。プラットフォームを降りると、ユキはずらりと並んで客待ちしている馬車を一台選び、私たちに乗るように促した。

四人乗りの馬車に向かい合って座った。やがて、総督府の巨大な建物が見えてきた。ここを曲がってしばらく進むと街中に入るはずだが、馬車はなぜか反対の方向に曲がって、しらかばばやし白樺林のこみち小路に入った。どんどんハバロフスクの街から離れていく。

「ユキさん！」

私は、向かい合ってソヒョンと並んで坐っているユキに言った。

「どういう事だ。方角が違う」

「ええ」

ユキは澄まして言った。

「この先に朝鮮人の村があります。そこに主人がおりますの」

ロシアは、沿海州開発のため、貧しい朝鮮人移民を積極的に受け入れていた。開拓に成功して繁盛している村もあるが、ハバロフスクの朝鮮人村は、貧しい低賃金労働者が集まってきたスラムで、泥棒と売春婦の巣窟となっているはずだ。

満州で手広く商売している男が住むような場所ではない。

いや。

手広い商売というのは、実は……。

「あんた……」

ソヒョンが、ユキを凝視して言った。

「やっぱり、嘘ついてる！」

言うなりソヒョンが懐ふてころに手を入れ、ナイフを引き抜き、あつという間に刃をユキの喉元に押し当て、

「動くな」

と押し殺した声で命じた。ユキは顔色一つ変えず、

「こんな可愛い子供なのに、なかなかの腕前ね」

と微笑んだ。ソヒョンは、ユキの耳に口を近づけ、

「まず、お前の名前、言え」

「私は、水野ユキだって言ったはずよ」

「ではなぜ、三原ユキさんか、聞いた時、びっくりしてた？」

「だって、同じユキって名前だもの」

「お前の夫、なぜ、朝鮮人チョンの村に住む？」

ユキは答えなかった。ちらりと馬車の外に眼を走らせ、

ラインチェウ「停住（停下来）！」

拳銃を構え、私とソヒョンに狙いをつけている。

劉春燕リウチュンインだった。

「안녕하세요 (てめえ)！」

ソヒョンが朝鮮語で、春燕チュンインに向かって絶叫した。

かつてソヒョンは、ロシア軍の瓊瑋あいくん侵攻、その後起こるであろう支那人虐殺を食い止めようと、ブラゴベンチエンスクの軍務知事ニコラーエフ中將に接近した。だが、義和団の女性団員・紅灯照ホンデンテウの劉春燕は、先手を打ってニコラーエフ中將を、ソヒョンの目の前で殺害し、ロシア軍の怒りの火に油を注いだそそ。その後、ロシア軍はアムール川を渡って満州に侵攻し、夥おびただしい支那人を老若男女見境なく虐殺したのだった。

「안녕하세요 안녕하세요 (お前は絶対に許さない)！」

涙まじりに罵ののるソヒョンに冷たい笑みを返して、春燕はユキに言った。

「呼ぶの遅いよ」

何時覚えたのか、日本語だった。ユキは、地面で悶絶する四人に眼をやり、

「この娘、ここまでやるとは思わなかったの。ハナに教わったのかしら。素晴らしい腕前だわ」

それからソヒョンに向かって言った。

「まずまず、あなたが欲しくなった」

「やだ」

ソヒョンはそっぽを向いた。

「お前、信用できない。なぜ、こんな真似をした？」

「言ったでしょ、あなたが欲しかったからよ。ソヒョン」

ユキは言った。それから私を見て言った。

「ずっと、あなたたちの事を追っていました。菊池中尉殿」

三原ユキの夫は、松花江を根城とする水賊の首領だった。水賊といっても、略奪行為は滅多にやらない。主立おもたった稼ぎは密輸品の運搬だった。

危ない橋を渡って稼いでいるだけに、抜け目なく各地の役人や商人を買収し、情報収集には熱心だった。

「一ヶ月前だったかしら、日本人の女馬賊が、ロシア軍に抵抗して闘っているという噂が伝わったの」

ユキは説明を続けた。

「その名前がハナだということもね。あなたたち、もう御存知だろうけれど、私とハナは、十三の時に大連の娼館で知り合い、十四の時、旅順に逃げ出したの。その旅順に日本軍が攻め込んできて、私は日本兵に手込めにされ、支那人の女衞せげんに売られた」

ユキの顔から笑みが消え、唇が歪んだ。

「それからいろいろあって、水賊の首領と出会った。私は彼の妻になり、水賊の流儀を叩き込まれ、やがて右腕と言われるまでになった」

遠くを見つめるような眼差しで、ユキは続けた。

「ちょうど半年前かしら。凄腕すじうでの日本人女馬賊の噂を聞いたの。しかも、その名前は水野ハナ。私、とても驚いて、すぐにも再会したかった。夫に頼んで、部下たちにハナを探させたの。でも、ハナの行方は掴めなかった。神出鬼没で、あそこに現れたと思ったら、また別の場所。川沿いの噂はすぐ耳に入るけれど、陸を駆けめぐる馬賊の行方となると、ちよつと手が届かない。そんな時、ハナが太太タイタイをやっていた客棧クワイチアン（旅館）の小間使いを連れた日本の元軍人が、ウラジオオストックにいるという噂が入ってきた。そこで、ウラジオオストックに向いて、あたたたちを見つけたし、ずっと後を尾おけていたというわけ」

「ではなぜ……」

ソヒョンが、劉春燕を見やって問うた。

「その女、そこにいる？」

「私たちは、義和団と手を組んでいる。私は日本人だけれど、夫や仲間は支那人よ。国のために立ち上がった義和団と仲間になるのは不思議じゃないわ」

「その女が、ブラゴベシチェンスクで何をやったか、お前、知らないのか！」

ソヒョンはわめいた。春燕は無表情で言った。

「もう、ユキには全て喋った」

チョルミンヒ「噫噫 噫噫（恥知らず）！」

ソヒョンは絶叫した。

「お前のせいで、何人殺されたと思おもてる！」

春燕は無言だった。ユキが言った。

「春燕は任務を果たしただけ。今は、別の仕事のため、私たちと手を組んでるの」

「別の仕事？」

興奮しているソヒョンが叫ぶ前に私が問うと、ユキは首を振った。

「まだ、言えないわ。でも、決して悪心や欲望のためではないの。それだけは分かって」

意外にも、春燕はソヒョンと私に向かって、拳銃を構えつつも、頭を下げた。

なおもわめこうとして口を開きかけたソヒョンを制するように、ユキは言った。

「あなたたちも、私も、そして春燕も、ハナを探している。理由は違っても、目的は一緒。

それに齊齊チチ哈爾ハルへの道中は危険なんてもんじゃないわ。ここは四人、手を組むべきだとは思わない？」

私にとっては願ってもない事ではあった。

三原ユキは、想像していたような、哀れな犠牲者ではなかった。むしろハナと同じく、たくましく動乱の大地を生き抜いてきた女丈夫だった。私たちを騙だますようにしてここまで連れてきた手口を見ても、油断のならぬ女であることは間違いないが、それでも、親友だったハナに再会したいという気持ちに、偽りはないはずだ。

私はソヒョンを見やった。ソヒョンは、まだ立ち上がることにできず地面に転がって悶絶する四人を指してユキに問うた。

「ではなぜ、お前の部下たち、私たち、襲った？」

「部下じゃないわ」

ユキは平然と言った。

「あいつらは、街で雇ったごろつきよ。ソヒョンさんの腕前は春燕から聞いていたわ。申し訳ないけど、危険な道中、足手まといにならないかどうか、私の目の前で試させてもらったの。ごめんなさいね」

「あいつら、すまないじゃ、すまない」

ソヒョンは、自分が鞆丸を蹴って倒した四人を見ながら言った。

「潰れてるかも、しれない」

「別に、いいわ。もうお金はあげてるから、それで医者にかかればいい」

「お前……」

呆れ声でソヒョンは言った。

「冷たい女だな。それ、絶対、だめ！」

ソヒョンは絶叫した。

「こいつら、病院、連れていけ！ でなきや、絶対、お前のところ、行かない！」

ユキは、御者に命じて四人の支那人をハバロフスクまで運ばせた。その後、怒り顔を引っ込めないソヒョンと私を案内し、朝鮮人村に入った。村の入り口で、劉春燕は別用があるからと、私たちに背を向け去って行った。

住民たちは、みな、貧しい身なりで、痩せこけていた。男たちは、ボロ屋の前で寝そべり、女たちはうつろな眼差しで、頭に籠かごを乗せ、足を引きずるように歩いていた。

緊張しながら歩いていると、やがて村の奥まった場所に、「増発興」と書かれた金看板を掲げた雑貨店が現れた。

「どうぞ」

三原ユキは私とソヒョンを招き入れた。

なかに入ると、食料品や反物、日用雑貨が並んだ棚たながあり、その奥は円卓を椅子で囲んだ支那式の居間となっている。

その円卓に坐っていた色白の支那人男性が立ち上がり、

「歓迎、歓迎フウアンイン（ようこそ）菊池さん、ソヒョンさん！」

と私たちを出迎えた。ユキの夫であり、水賊の首領増世策ツンシイツウだった。荒くれ男たちを束ねているにも関わらず、増世策は、まるで女のような、瘠やせて小柄な美男子である。

「私にとつてユキは、妻ではありません」

店の掌櫃ジャング（番頭）に茶を運ばせ、増世策は言った。

「われわれ水賊の副首領です。頭が切れ、度胸もある。私より首領に相応ふさわしいかもしれな

い。そのくらいの女傑ヌクレーチイェです」

褒められながら、ユキは照れもせず、薄く微笑みながら茶を呑んでいた。

「あなた方は、その水野ハナさんを探しておいでなんでしょう。私としては、そのハナさんと関係を結び、できれば、馬賊と水賊の同盟関係を作りたいのです」

増は説明した。

やがて清国が降伏すれば、この国は内乱状態に陥る。ロシアは満州に進出し、あなた方は日本はそれを坐視してはいないだろう。西欧列強は衰えた清国を食い散らかし、清国はますます衰える。

「清を打倒し、支那を漢民族の手に取り戻そうという運動も、盛んに起こっています」

「興漢会シイハンフンフクワイですか？」

私は問うと、増は頷いた。

興漢会とは、清国顛覆と漢民族王朝復興を企む活動家たちの団体で、日本の右翼勢力から資金面その他で莫大な支援を受け、活動を活発化させていた。私がブラゴベシチェンスクで出会った東興会の三人は、紅灯照ホンタンテンチョウに女装してロシア軍人を殺害し支那人虐殺を煽動しようとしていた。彼等は、環琿アイクンで水野ハナにわたりをつけようとして失敗し、ソヒョンや静枝、春美に去勢された末に悲惨な最期を遂げたが、彼等の同類が興漢会と連動し、シベリアや満州各地で内乱状態を作り出そうと蠢うごめいているのではないか。

増は説明を続けた。

「とにかく、今後の支那はますます乱れる一方です。私たち水賊にとっては稼ぎ時だが、ひとつ選択を間違えると取り返しがつかぬ事になりかねない。だから、力のある馬賊と連携したいのです。ハナさんを知っているあなたたちが、ユキと一緒に彼女を探していたければ、こんな心強いことはありません」

ユキは頷き、私たちの顔を覗のぞき込むようにした。私は、ソヒョンを見た。ソヒョンは、しかも面のまま、軽く頷うなずいた。

「では、決まりですね」

増は立ち上がり、私と握手し、ソヒョンにも手を差し伸べた。ソヒョンは流石に立ち上がり、手を握り返した。

「このようなむさくるしい所に案内して、失礼しました。馬車を呼んで、あなた方をハバロフスクの街中まで送らせます。客棧クウチヤン（旅館）は私どもで予約しておきました。準備ができたなら私どもの方から客棧に参りますので、それまで、市内見物でもしてお過ごしください」

増世策が指定した、ハバロフスク市内の支那式旅館は、格としてはまあまあだった。二部屋とってあったが、ソヒョンは、私と同じ同じ部屋に泊まると主張した。

「まだ、あの女、信用できない。いざとなったら、私、菊池さん、守らなければ」

ソヒョンは、部屋に入り、温突オンドルの床にあぐらをかいて、私に言った。

「だから、一緒、泊まる」

本来、私が彼女を守らねばならぬ立場なのに……。

私は苦笑したが、またも目の前で、彼女が四人の男を瞬時に倒したのを見たばかりだ。私といえば、彼女に眼を奪われた一人を柔術で投げ飛ばしただけだった。

「なあ、菊池さん」

ソヒョンは硬い面差しで問うた。

「あの三原ユキ、ほんとに、ハナさんに会いたいのか？」

言われてみれば、彼女を手込めにした日本兵たちに復讐しようと思死だったハナに較べて、ユキがハナについて語る時、どこか冷めた雰囲気がある。

「それに、あの写真……」

釜山で見た、橋口平助の背囊はいのうに入っていた写真には、十三、四歳の頃の三原ユキと、軍服姿の橋口平助が並んで写っていたのだ。

「菊池さん。ハナさんとユキさん、それに橋口平助、ほんとうは、何あったんだろ？」

「わからない」

私は答えた。

「これから幾日になるか分からないが、ユキさんと一緒に過ごす事になる。その間に探りを入れるしかないだろう」

「なんだか、やだな」

ソヒョンは頬ほおをふくらませた。

彼女の不機嫌は二日後、水野ユキがホテルに現れた時、頂点に達した。ユキの背後に、劉春燕リュウチュンイェンが手に荷物を掲げて立っていたからだ。

「文句は後で聞かむ」

眦まなじりを張り裂けそうにさせて叫ぼうとしたソヒョンを手で制して、ユキは澄まし顔で、

「私は、あなたと違って、喧嘩やとつくみあいにはさっぱり」

と、春燕の腕にしがみつきながら説明した。

「あなたは、まだ私のことを信用していないみたいだから、信用してくれているこの方に護衛を頼んだわけ」

怒りのあまり反論もできないソヒョンを尻目しりめに、ユキは私に向かって、

「馬車を呼んでおいたわ。行きましょう」

と促して玄関に向かった。

馬車でハバロフスク駅に行き、そこから汽車で半日かけ、ミハイロセメノフスキーという都市に着いた。そこから、船で松花江をくだって哈爾濱ハルビンに行き、さらに西の齊齊哈爾チチハルへの道を探るといのが、ユキがたてた計画だった。

ミハイロセメノフスキーまでの道中、ソヒョンはいっさい口をきかなかった。だが、ユキは一向に気に介さず、平然と私や春燕に話しかけ、ニコリスクからハバロフスクまでの汽車のなかでと同様、かいがいしく一同の世話を焼いた。

ミハイロセメノフスキー駅に着くと、ユキは馬車を雇い、馴染みの宿だというホテルへ向かった。

アムール川と松花江の分岐点として栄えた街だ。アムール川の対岸は清国領だが、今のところ衝突は起こっていないらしい。とはいえ、ロシア側も清国側も川岸に砲台を並べ、兵士が多く詰めており、一触即発の緊張感が漲っている。

ホテルに着くと夕暮れ前だった。ユキは、
「顔を出さねばならないところがあるので、春燕と出掛けます。菊池さんとソヒョンちゃん、ホテルで食事していて」

と言つて、春燕と二人、部屋へと消えた。私はソヒョンと同室だった。

一休みして、一階の食堂に行き、夕食をとった。パン生地にも野菜を詰めて焼いたピロシキに、赤い色をした酸味の強いスープだった。寝酒のウォッカをもらつて食堂を出ると、ちやうど帰ってきた三原ユキと劉春燕に鉢合わせした。

私とソヒョンは眼を見開いて棒立ちになった。

「ただいま」

軽く頭をさげてにつこり微笑んだユキは、足までおおう白いドレスに、つばの広い帽子、アールヌーヴォーというのだろうか、フランスの最新ファッションに身を固めていた。濃いめに化粧し、ふだんの薄化粧とは別人の絶世の美女だった。ソヒョンまでが眼を丸くして、頬を赤らめている。

一方の劉春燕は同じようなスタイルだが、こちらは薔薇のような赤色を基調としたドレスが、一重瞼のきりりとした面立ちを引き立てていた。

「ミハイロセメノフスキーの知事を、表敬訪問しましたの。お得意さまでですので」

ユキは婉然と言い、茫然とユキを見つめているソヒョンの頬に、右の掌を当てた。

「お目こぼしのためなら、女を武器にするのは、当然よ」

二人は優雅にお辞儀をして、部屋に消えていった。

「はあー」

ソヒョンが、緊張が解けたように溜息を漏らした。

「ソヒョン (きらい) ……」

美しい女に弱いのは、男だけではなさそうだ。

翌朝、食堂で落ち合ったユキと劉春燕は、昨夜ほどの派手なドレスではなく、ロシアの中流家庭の普段着だったが、同じテーブルについていたソヒョンからは、不機嫌な表情が消え、しおらしく振る舞っていた。

朝食を終えると、馬車で船着き場に向かい、渡し船に乗って清国側に渡った。船を降りると、清国兵の駐屯地があり、天幕が並んでいた。

私たちの姿を見て、矛を携えた二人の衛兵がやってきた。旅券を見せろ、と要求する。

私が鞆から取り出そうとすると、ユキはそれを制止し、無言でそっぽを向いた。衛兵た

ちは怒鳴った。

「可疑的クワイードウクスウな女、過來グクオライ（怪しい女だ、来い）！」

衛兵に腕を掴まれたユキは、いきなり手にした扇子で、相手の股間を打った。衛兵は呻うめいてうずくまった。もう一人の衛兵が、矛を突きつけようとした。その足を劉春燕が払い、仰向けに倒れた衛兵の股間を爪先で蹴った。衛兵は絶叫し、悶絶した。

たちまち他の衛兵たちが血相変えて駆けつけ、私たちを取り巻いた。

私とソヒョンは眼を丸くして、顔を見合わせた。ユキも春燕も、こんなところで無用の騒ぎを起こし、何をするつもりなのだろう。

「站住ヂアンヂウ（待て）！」

奥から、隊長と思われる将校が四名の従卒を連れて駆けつけてきた。彼は大声でわめいて衛兵たちを下がらせ、ユキの前に立って頭をさげた。

「真是太抱ヂエンシタイバオ歉アチエンルウ了、太太タイトイ（大変失礼しました、奥さま）！」

こちらへどうぞ、と歩き出した隊長の後ろを、ユキは胸を張り、顎あごを上げ気味に歩き出した。持参していた荷物は地面に置かれたままだったが、隊長の従卒たちが、争うように荷物を持つてついていく。

「来ライ（行こう）！」

劉春燕が私たちに微笑みかけ、同じように荷物を置いたまま歩き出した。

なるほど、用意周到な彼女は、ロシア側の知事だけでなく、清国側の軍高官にも、袖の下を渡しているのか、「女」を武器にしたのか、鼻薬はなぐすりをきかせていたと言うことを示したかったのか。

そのために、二人の衛兵が擧丸を攻められ、悶絶する羽目に陥ったのだ。

「ヨクヨク（やっぱり）……」

傍らでソヒョンが呟いた。急所を攻められた二人の衛兵を仲間たちが介抱している様を見ながら、再び不機嫌な面差しに戻っていた。

「和早ワサハヤ早ササ（気に入らないな）！」

清国軍の駐屯地内で、私たちは衣裳を着替えた。

私だけでなく女たちも、打って変わって、支那の苦力クイリ（肉体労働者）のような粗末な衣服になり、三角の帆を複数張った支那式帆船シヤンクフンに乗り込んだ。舵を操る水夫が二名同乗し、交替で船を動かした。

八月は終わろうとしていた。短かった夏は去り、川面から吹き付ける風は、肌寒さすら感じる。

「哈爾濱ハルビンまで何日かかる？」

船のあまりの貧弱さに、ソヒョンは呆れて問うた。日本の漁船くらいの大きさで、甲板はなく、左右の舷ふなはたに六本ずつ一メートルくらいの柱が立ち、屋根がついている。船底には食糧や、蚊帳などの道具に混じって、小銃と拳銃が二挺ずつ置いてあった。

ユキは答えた。

「半月くらいかしら」

「半月？ こんな船で、大丈夫か？」

「大丈夫、夜は、買収してある街に泊まるから、安心して」

「兵隊のきんたま蹴っても、大丈夫な街、か」

ソヒョンはそっぽを向いた。ユキは笑って問うた。

「気に入らない？」

「ハナさん、あなたの仇を撃つため、命がけだった」

ユキを睨みつけ、ソヒョンは言った。ユキは笑みをおさめた。ソヒョンは続けた。

「ハナさんも、私も、あんな事、しない」

「あんな事とは？」

静かに問うユキに、ソヒョンは答えた。

「男のきんたま蹴る、殺す、それは、相手が悪い奴か、襲われた時だけ。でも、あんたらは……」

春燕にも眼差しを走らせて、ソヒョンは言った。

「楽しんでる」

「そうね……」

ユキは眼を伏せて、呟いた。

「ハナや、あなたと違って、私は弱かった。それなりに強くなった今の自分を、楽しんでるのかも……」

素直に認めたユキに、ソヒョンは虚を突かれた面差しになった。ユキは、劉春燕に顔を向けて問うた。

「春燕、あなたもそうよね」

「わたし、昔、ユキと一緒に」

春燕は、寂しげな面差しで答えた。

「弱かった。売られて、男に、抱かれた」

「紅灯照ホオランダアンチアオに入った娘さんは、ほとんどそう。かつては醜業婦だった人なの」

ユキは、いつしか春燕に寄り添い、肩に手を廻して抱いた。春燕は、ユキの肩に頭をもたせかけ、涙を零しはじめた。

この二人は、いったい……。

ただ、水賊と義和団が、利害で結びついているだけとは思えない。

「ハナから聞いてないの？」

啞然として見つめる私たちに気づいて、ユキは言った。

「私と春燕は、旅順で仲良しだったのよ」

私とソヒョンは強張った面差しのまま、しばらく声もなかった。

ハナから聞いていたのは、ハナとユキは十三歳の時に大連の同じ遊郭に売られてきて、仲良くなったということだった。ある時、ハナは日本人客の股間を蹴り上げた。その客がハナのことを「大日本帝国の大陸進出の先兵だ」と言ったのに激怒したのだ。ハナは、ユキの手を引いて娼館を飛び出した。

その後、流れ着いた旅順で小間物屋夫婦の世話になっていたが、明治二十七年の日清戦争で、日本軍が旅順に突入し一般市民を虐殺した時、ユキは、井口虎吉や橋口平助たちに手込めにされ、支那人の女衞せびんに売られた。ハナはたまたま旅順城外にいて、戦禍は免れまぬがたが、ユキとは離ればなれになった。

ハナからは、旅順で劉春燕と知り合っていた事など、聞いたこともない。

ただ……。私は思い出した。はじめて瓊瑋あいくんで春燕と会ったときだ。春燕は、ハナに会うために旅順からやってきたと言っていた。なぜ、そんな遠くからハナに会いに来たのか、当時は腑ふに落ちなかったが、かねてからの知り合いだったのであれば、説明がつく。

むしろ、ユキの言い分が本当だとしたら、なぜハナは、それを打ち明けてくれなかったのだろう。

私は、ソヒョンの顔を窺うかがい見た。眼は見開いたまま瞬まばたきもせず、唇は細かく震えている。彼女も、私と同様、いま初めてそれを知ったようだ。

「そうか……」

ユキは、私とソヒョンを交互に見やりながら呟いた。

「やはり、ハナは話してなかったのね」

「一体、なにが……」

ソヒョンが口を開いた。

「なにが、あった？」

「どこから話そうかしら……」

ユキは、少し考え込んでから、

「少し長くなるけれど、かまわないわね」

日差しを浴びて燦きらめく川面かわもを見つめつつ、言った。

「道中は長いだから」

(つづく)